森林レンジャーがゆく（66）

離れていくタカたち

市内の低山や丘陵地、里山などでは、オオタカやサシバ、ハチクマといった稀少な猛禽類（もうきんるい）が生息し、繁殖記録もあります。しかし、生息状況調査を開始してから６年目になる今年も、あまり楽観視できる結果にはなっていません。

スズメバチの幼虫などを好んで食べる夏鳥のハチクマは、３年連続で繁殖に失敗、または飛来なしと見られ、繁殖成功率の低下や個体数の減少が明らかに目立っています。同じく夏鳥で、ヘビやカエル、昆虫などを好んで食べるサシバは、つがいで市内に飛来し、都内で唯一繁殖が成功したと見ています。都内最後のサシバになってしまうことが考えられ、絶滅の一歩手前ではないかと思っています。そして、オオタカです。都会の公園などで増加しているといわれていますが、この猛禽類の生態や行動について勘違いが多い様に思います。オオタカは、人が気付かないうちに畑や緑地などでハトやヒヨドリ、ムクドリなどの鳥類を狩るタカで、市内では減少傾向にあります。この６年間で、市内のオオタカの営巣場所やつがいの消失、繁殖失敗などを数件確認しました。さらに今年は、近隣の市で営巣木が伐採されるという残酷な事例まで起きています。結果的に、今年市内で繁殖に成功したオオタカのつがいは、１組のみでした。

これまで、密猟や色々な影響を受けてきた猛禽類は、やや安定して生息するトビやノスリ以外は、徐々に消えてゆく種類が多い状況です。本州最強の捕食者といわれているイヌワシは、西多摩エリアでは見られなくなりました。残された重要な捕食者であるクマタカや前記のタカたちが大切にされないままなら、いつかイヌワシのように市内からその姿を消す日が来るかもしれません。

（パブロ）